

第16回世界農業遺産勉強会

奈良教育大学 教育連携講座 中澤静男

- ◇開催日時 平成29年7月27日(水) 18時30分～21時
◇会場 中澤研究室
◇内容 「先進国＝工業国、途上国＝農業国」は本当か?」担当：祐岡先生

(1) 世界の飢餓の要因

①食料は不足しているか

2007年の三大穀物生産量：20億トン

大豆：2億トン

イモ：7億トン

2007年の人口は66億人 三大穀物だけでも

一人当たり年間300キロ

→ 食料は十分にある。← 食料が偏在している。

(食料を購入する富の偏り)



②世界の栄養不足人口

・世界の栄養不足人口の推計は、10億2000万人(2009年) 急速に増加している

・栄養不足人口の増加の要因

世界経済の深刻な不況が、途上国の経済に影響を与えている。

近年の食料価格の高騰

・栄養不足人口の地域的偏り

サハラ以南のアフリカ大陸、インド、バングラデシュ

(2) 食料の流れ

・所得水準が上昇するにつれて農業就業人口の割合は低下する。

・途上国＝農業国、先進国＝工業国という認識は間違っていない。

・基本的な食料の貿易に関する限り、途上国＝農業国、先進国＝脱農業国という認識は修正が必要

①表4「穀物の地域間貿易」より

・輸出超過の地域は、北米・EU・オセアニア：先進国の地域

・アジアとアフリカは純輸入地域

→ 穀物は先進国から途上国に流れている

②穀物貿易の特色

・穀物は生産された国の中で消費される割合が大きく、自国の消費に必要な量を超えた小さな部分が貿易に向かう 薄い市場

・途上国はその薄い市場から穀物を輸入している。←先進国である日本が割って入るのは迷惑かもしれない。

・アジアでは、経済成長とともに海外の食料への依存度が高まる傾向がある。(日本・韓国・台湾・中国沿岸部)

(3) 先進国と途上国の農業力

①表5「農業生産性の格差(1980年)」より

・途上国の労働生産性は低い

面積当たりの収量が低い(土地生産性が低い)

土地装備率が小さい（農場の規模が狭い）

- ・途上国の農業における過剰労働・余剰労働の問題

人手はありがたいように見えるが、ある線をこえると生産への貢献度が急速に低下し、ときには全く貢献しない状態になる

- ・途上国で増加した農業労働力には貢献度の低い労働が含まれている
- ・途上国の農業生産は伸びているが、人口の増加がそれをはるかに上回っている

②途上国の農業従事者の低賃金：途上国の農業政策の問題点

- ・途上国の農家は国際価格よりも低い手取り額を強いられてきた

国内の食料の価格を抑制するため

食料価格の抑制は、その他の産業従事者の賃金抑制にもつながり、産業の競争力を支える

農業が生み出した富を吸い上げ、工業化のための投資に振り向けている

③先進国の穀物生産の問題点

- ・1980年代のEUでは、農産物の過剰問題が大きな課題だった。

市場で需要と供給が釣り合う価格よりも高い価格を農家に約束したため、市場が必要とする以上の農産物が生産されてしまった（過剰な農業生産を刺激する保護政策だった）。

→ EUとアメリカの間の貿易摩擦の先鋭化

- ・貿易の新しいルールづくり

1993年 GATT「関税と貿易に関する一般協定」ウルグアイ・ラウンド

- ・関税以外の輸入障壁をすべて関税に置き換える
- ・輸出補助金を少しずつ減らす
- ・国内の農業政策を変えていく

「農家の所得を確保するための政策を行ってもよいが、それが生産を刺激するものであってはならない」

2001年 WTO（世界貿易機関）ドーハ・ラウンド

- ・先進国の保護政策が途上国の農産物の販路を狭めている

農産物の増産に結びつく先進国の農業保護政策が、食料を必要とする途上国に歓迎されるどころか、途上国の農業の発展を阻害するものとして批判されている

(4) 途上国の農業のパワーアップ



「緑の革命」

小麦の新品種はインドやパキスタンの食料生産に大きく貢献

コメの新品種はインドネシアやフィリピンなどで食料の大幅な増産をもたらした

「虹色の革命」

アフリカに必要なのは、単一の作物を標的にした緑の革命ではなく、キャッサバやヤムイモ、タロイモ、小麦、トウモロコシなどさまざまな作物を視野に入れた「虹色の革命」。